

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月21日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520131

研究課題名（和文）ジェームズ・ギブソンの視覚論と二十世紀アメリカの視覚文化

研究課題名（英文）James Gibson's Theory of Vision and Visual Culture in the twentieth-century America

研究代表者

樽沼 範久（KURENUMA NORIHISA）

横浜国立大学・都市イノベーション研究院・准教授

研究者番号：20313166

研究成果の概要（和文）：ジェームズ・ギブソン（1904-1979）は「アフォーダンス」の概念を創り出した「生態心理学者」として知られている。しかし、ギブソンの探求には何が賭けられていたのか。われわれの生きる複雑な環境（サイバネティクスによる通信・伝達と制御の対象よりも複層的な環境）とダイレクトに接触する知覚システム。それを探求する現代の「自然哲学」として、私はギブソンの視覚論を捉えなおす。そしてこの視座から、20世紀アメリカの視覚文化、とりわけ環境配置としての建築の視覚的様相を批評的に分析する。

研究成果の概要（英文）：James J. Gibson (1904-1979) is known as an “ecological psychologist” who created the concept of “affordance”. But what is the purpose of his project? In this research, I reconsider Gibson’s theory of vision as contemporary “natural philosophy” in which perceptual systems attempt to directly encounter some complex environments in our world. Those environments are more complex than objects of communication and control in cybernetics. In this perspective, I go on to critically analyze “visual culture” including visual aspects of architecture in the 20th century America.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2010年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2011年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 総計 | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：視覚文化、建築、アメリカ、二十世紀

1. 研究開始当初の背景

20世紀アメリカを生きたジェームズ・ギブソン（1904-1979）は、「アフォーダンス」の概念を創り出した「生態心理学者」として知られている。しかし、ギブソンの探求には何が賭けられていたのか。ギブソンの理論はひろく知られるようになったものの、ギブソンの探求や彼の遺したテキストが何と闘っ

ていたのか、その探求・格闘の「根拠」「必要性」は、語り尽くされていないように思われた。

授業ではフロイトの精神分析理論にくりかえし立ち返り、集団心理学の問題やプロパガンダの問題にも取り組んでいたギブソン。あるいは、第二次世界大戦前はマルクス主義研究会にも参加し、冷戦期には大学での「赤

狩り」に抗議したギブソン。飼い馴らすべき「羊」の群れと人々をみなす政治・思想の前提—フーコーの言葉で言えば「牧人型権力」—を問いなおすギブソン。彼の探求の「根拠」には、さらに発掘すべき鉅脈が眠っているように思われた。この鉅脈の広がり、ギブソンの探求の中心であった視覚論（知覚システムとしての視覚の理論）それ自体から、たどる必要がある。

以上の問題意識のもと、まずはギブソンの視覚論を、20世紀アメリカの「視覚文化」の歴史的・批評的コンテクストのなかで読む研究が必要だと考えた。しかし、知覚心理学から美術史・芸術論にわたる複合領域の研究のため、これに類するアプローチは、国内外ともに不足しているのが現状だった。そのため、この仕事を通して、ギブソンの探求に潜在する歴史的・批評的な機能を先鋭化することが可能になるのではないかと考えた。

ギブソンの視覚論が問うているのは、ものを見るときに頭のなか（眼—神経—脳）で何が起きているのかではない。むしろ、どのような環境のなかに観察者の頭が配置されているのか、そして、頭を包囲している外部の環境から、観察者が時間をかけて、どのような情報を能動的に差異化し、生きていくのかを問うている。ギブソンが批判しているのは、イメージ・表象によって世界と間接的に関わる網膜中心主義、イメージ中心主義のモデルだと考える。

また、ギブソンの視覚論を支える「生態光学」は、生理光学が中心的に扱ってきたような、刺激の瞬間的な伝達・処理を問題にするのではない。「流れ」として持続する外部の環境のなかから、観察者の視覚システムを直接に活動させることのできる差異＝情報を探索する。（ギブソンの定義する差異＝情報は、ミュラーに代表される19世紀の生理学者たちの定義した刺激や、20世紀にシャノンやベイトソンが考えた情報のように、神経系などの伝達経路を通過するものではない。ギブソンの差異＝情報は環境に内在・実在し、知覚システムと接触することによって、生のシステムを活動させる activate ことができるものである。）

こうしたギブソンの視覚論は、流動する環境のなかの差異＝情報と直接に遭遇し、それによって自らのシステムを活動させていく。視覚システムと差異＝情報の直接遭遇の「外部」から、この視覚システムをコントロールしようとする試みは挫折する。むしろ視覚システムは、われわれの生きる複雑な環境（サイバネティクスによる通信・伝達と制御の対象よりも複層的な環境）とダイレクトに接触する知覚システムであり、このような能力を探索する現代の「自然哲学」が、ギブソンの視覚論なのだ。

他方、持続する「流れ」としての視覚環境を前景化すると同時に、人間の視覚（および行為）を外部からコントロールする技術でもあった20世紀アメリカの鉄道、自動車、飛行機、映画は、どれもギブソンの生涯と理論に密接に関わる重要な技術・メディアであった。ギブソンはこれらの技術・メディアとの「両義的」折衝のなかで、前述したような「自然哲学」としての視覚論を探求していったのではないかと考えた。

この視座から、本研究では20世紀アメリカの美術も再考すべき対象になると考えた。ギブソンの視覚論は、いわゆるモダニズム美学の視覚論とは異質である。絵画を瞬間的な純粋視覚性を絵画の理念と捉えるのではなく、ギブソンは視覚を環境の持続と差異に開いていくからだ。モダニズム美学の視覚論ではなく、それならばむしろポロックの「オールオーバー」絵画と観客との関係に、ギブソンの視覚論と共鳴する領域がある。

イメージ・表象によって世界と間接的に関わる網膜中心主義、イメージ中心主義からの離脱を図ったデュシャン（1915年以降はアメリカを中心に活動している）。そして、デュシャンと共鳴するラウシェンバーグやケージが、ギブソンの視覚論と交差する美術家・芸術家として浮かびあがってくる。

有名なデュシャンの網膜中心主義批判は、ギブソンの網膜中心主義批判と交叉する。また、ポロック、デュシャン、ラウシェンバーグが活用した「水平面」は、視覚システムが走査（スキヤニング）する基礎として水平面を見出したギブソンの「地面理論」に着地し、同時に、そこから飛躍するだろう。モダニズム美学やサイバネティクスの通信と制御とは異なる彼らの探求が、本研究「ジェームズ・ギブソンの視覚論と二十世紀アメリカの視覚文化」にとっても重要な参照点となると考えた。

以上が、本研究を開始した背景であり、また、この探求の「根拠」「必要性」の概略である。

2. 研究の目的

サイバネティクスによる通信・伝達と制御の対象よりも重層的・複層的な環境とのダイレクトな接触を探索する現代の「自然哲学」として、ギブソンの視覚論を捉えなおすこと。そして、こうしたギブソンの視覚論の可能性から、20世紀アメリカの視覚文化（映画・写真・絵画、そして建築の視覚的様相）を批評的に分析すること。この二つを研究の主要な目的とした。

3. 研究の方法

サイバネティクスによる通信・伝達と制御の対象よりも重層的・複層的な環境とのダイ

レクトな接触を探求する現代の「自然哲学」として、ギブソンの視覚論を把握する本研究にとっては、20世紀アメリカの「画像」（映画・写真・絵画など）のみならず、環境配置としての建築の視覚的様相を、ギブソンの視覚論・知覚システム論の視座から批評的に分析する方法も有効と考えた。

研究開始当初は建築の視覚的様相を扱うことは予期していなかった。ギブソンに関する先行研究においても、画像論とともに建築論は極めて手薄な現状である。また、建築論・建築史でもギブソンの理論が十分に活用されているとは言い難い。環境理論や生態学への注目が建築分野で切迫したものになっているだけに、建築でもギブソンへの関心は高まっている。それだけに、本研究で建築の視覚的様相を経由することは、ギブソンの視覚論の射程を拡張すると同時に、建築を含めた複数の学領域に貢献する価値を持つはずだ。

4. 研究成果

(1) まず、サイバネティクスによる通信・伝達と制御の対象よりも重層的・複層的な環境とのダイレクトな接触を探求する現代の「自然哲学」として、ギブソンの視覚論を捉えなおす仕事は、単著論文「問題の真偽と実在の区分—ギブソンとベルクソンの方法」で基本視座に据えることができた。

その際、ギブソンの著書や論文のみならず、草稿や書簡を含めて考察の対象にしていることにも特色がある。これらの資料は、ギブソンが1950年から1979年まで研究・教育を行っていたコーネル大学での調査を活用している。

そして、ギブソンの哲学的方法を先鋭化するため、ベルクソンの哲学的方法に補助線を求め、「問題の次元で真偽を見極めること」と「混合物としての経験のなかに質的差異を切り分け、実在の区分を見出すこと」の二つを、ギブソンとベルクソンの哲学的方法に通底する通奏低音として抽出した。

サイバネティクスによる通信・伝達と制御の対象よりも重層的・複層的な環境とのダイレクトな接触を、知覚システムの作動から探求するギブソンの「自然哲学」は、ベルクソンの企図にも似て、上記のような厳密な哲学的方法によって見出されることも、明らかにすることができたはずである。

なお、ギブソンの視覚論を、その「視覚文化」的意味から測るまえに、知覚システムの生物学的基盤から再考する必要性にもぶつかり、ダーウィンの進化理論に考察の幅を広げたことも付言しておきたい。ギブソンの重視した「生きるための視覚」を、ダーウィンの概念「生きるための闘い」から支えるためである。

この問題意識からダーウィンを読み解く成果として、単著論文「ダーウィン、フロイト—剥き出しの性／生、そして差異の問題」（『岩波講座哲学12—性／愛の哲学』岩波書店、査読無、2009、pp. 91—115）を発表することにもなった。ギブソンが探求しようとした、われわれの生きる複雑な環境は、サイバネティクスが制御しようとした通信・伝達の情報環境よりも、むしろダーウィンが調査・思考した自然史の複雑な環境のように、複層的である。ギブソンの視覚論を現代の「自然哲学」として捉えなおす仕事にとって、ダーウィンの「自然哲学」を経由することの重要性はそこにある。

(2) 環境配置としての建築の視覚的様相を、ギブソンの視覚論の視座から批評的に分析する仕事は、単著論文「知覚と生（4）—建築の生態学（1）」、「建築の変異体—エコロジカル・アンフランクマン（生態学的極薄）」、「生態学的建築をめざして—建築とギブソンの生態学」などの一連の論考で展開することができた。

これらの論考では、ギブソンの視覚論から建築にアプローチする仕事を深め、「画像の生態学」を「建築の生態学」に統合する新しい方向性を見出したと考えている。ギブソンの視覚論と建築の関係はこれまでも示唆されてきたが、歴史的資料を活用しながら、具体的・理論的に展開させた研究は、世界的にみても本研究が初めてのものになるはずだ。

単著論文「知覚と生（4）—建築の生態学（1）」では、ギブソンが最晩年に「ソーク生物学研究所」（ルイス・カーン設計）に滞在していた事実も下敷きにしなが、ギブソンの「アフォーダンス理論」や「生態光学」とカーンの建築・建築理論（とくに「利用可能性」と「場所」の概念）に共通する思考を引き出した。

そして単著論文「生態学的建築をめざして—建築とギブソンの生態学」では、ギブソンの生態学における環境の概念を理解することからはじめ、建築を自然史のプロセスとしてとらえなおすことに行き着いた。また、ギブソンの「アフォーダンス理論」を発展させながら、自然史のプロセスとしての建築がめざすべき課題を提示し、それを建築家ルイス・バラガンの建築（「ルイス・バラガン邸」、「カプチーナ修道院」、「サン・クリストバル厩舎」、「ヒラルディ邸」）と遭遇させながら、機能主義的建築を超えた生態学的建築の本性を描き出した。

この二本の論文は、私たちの視覚や行動の営みが、どのように建築の要素と接合していくのかを明らかにしつつ、私たちが環境について、どのような認識と行動の誤りを訂正できず、現在の文明的危機に至ってしまった

のかを問いかけることにもなった。

これら一連の仕事に対して、とりわけ建築家・編集者からの反応は、本研究者の予想を超えるものがあった。その反応は例えば、国内外で活躍する建築家たち（藤本壮介、平田晃久、石上純也、山本理顕、北山恒各氏）との対談・座談、あるいは『SITE ZERO/ZERO SITE』建築特集号での責任編集依頼（研究期間外の刊行）に繋がっている。

「画像論」を主軸とする研究発表は、第二回恵比寿映像祭ラウンドテーブル「オルタナティブ・ヴィジョンズ—映像の生態学」、及び本研究者による発表「ある「密度」を備えた映像・場所の準備」のなかで、コンピュータによる画像・環境の設計に多様性を取りこもうとする現在の潮流の基盤を問いなおし、デザインされた「インヴィテーション・キャラクター」によって行動を誘発・制御・管理しようとする「環境管理アーキテクチャ」をギブソンの視座から批判した。これから未刊行の研究を既刊の研究と統合し、さらに順次、論文・著書として発表していく計画である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

- ① 樽沼範久、「生態学的建築をめざして—建築とギブソンの生態学」、『思想』、査読無、No. 1045（特集：建築家の思想）、2011、pp. 77-107。
- ② 樽沼範久、「建築の変異体—エコロジカル・アンフラマンズ（生態学的極薄）」、『10+1 web site』、査読無、201012 ISSUE（特集：石上純也—現代・日本・建築のすがた）〈<http://10plus.jp/monthly/2010/12/post-15.php>〉。
- ③ 樽沼範久、「知覚と生（4）—建築の生態学（1）」、『SITE ZERO/ZERO SITE』、査読無、No. 3（特集：ヴァナキュラー・イメージの人類学）、メディア・デザイン研究所、2010、pp. 324-353。
- ④ 樽沼範久、「問題の真偽と実在の区分—ギブソンとベルクソンの方法」、『思想』、査読無、No. 1028（特集：ベルクソン生誕150年）、2009、pp. 171-192。

〔学会発表〕（計1件）

- ① 樽沼範久、「ある「密度」を備えた映像・場所の準備」、第二回恵比寿映像祭（招待公演及び座談会「オルタナティブ・ヴィジョンズ—映像の生態学」）、東京都写真美術館、2009年12月13日。

〔図書〕（計1件）

- ① 樽沼範久、他、岩波書店、『岩波講座哲学12—性／愛の哲学』、2009、pp. 91-115（単著論文「ダーウィン、フロイト—剥き出しの性／生、そして差異の問題」）。

〔その他〕

ホームページ等

http://er-web.jmk.ynu.ac.jp/html/KURENUMA_Norihisa/ja.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樽沼 範久 (KURENUMA NORIHISA)

横浜国立大学・都市イノベーション研究院・准教授

研究者番号：20313166

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：